きばっちょいもんさ

鹿児島からグローバルスタンダードへ

鹿児島精機株式会社
代表取締役　山村　幸弘

弊社は，1975年10月に鹿児島空港のある溝辺町（現，霧島市）の誘致企業として先代が法人設立し，開業しました。開業当時は，大阪の工業用ミシン会社の下請け企業としてクランクシャフトの量産製造をメインとし，20数年に渡り事業経営を行っておりました。

2000年頃，工業用ミシンの製造が中国へ移管されるという話になり，事業転換の必要性に迫られ，真空ポンプ部品や半導体製造装置用部品へ事業転換を進めました。

事業転換後，新規のお客様から，「医療部品に使われるチタンの3D加工をできないか？」という依頼があり，なんとか新技術に対応しようと相談したのが鹿児島県工業技術センターでした。その当時，3D加工ができる企業が少なく，また加工に必要なソフトを購入する資金も当社にはなかった事からセンターで，3D加工プログラムを教えて頂きながら技術習得し，3D加工の活用を積極的に進めていきました。

その後，3D加工展開が功を奏し，事業を継続できましたが，2009年のリーマンショックで経営が一変しました。リーマンショックによる景気悪化が要因で，売上高が対前年同月比90%減少するなど境地に立たされた記憶が今でも鮮明に残っております。

そのタイミングで注力したのは会社の技術底上げであり，技術習得を図る為に積極的にセンターの3D-CAD・溶接に関する技術講習をして頂き，人財育成に注力しました。

2011年にはグローバル化の波が押し寄せる中，競合相手と考えていた中国のマーケティングを進めながら中国進出を図り，中国での部品製造調達も開始しました。中国展開スタート当初は，言葉の問題や文化・習慣などの違いから悪戦苦闘しましたが，精密部品加工のレベルアップを進めながらグローバル化の本質を身をもって体験し，理解できました。2015年にはベトナム3D設計事務所を開設，2018年にはベトナム製造工場の開業を行い，3D設計加工技術を活用した競争力強化を進めました。

現在，世界で拡散しているコロナウィルスの影響により企業としての役割は激変し，これからの企業に求められる価値が大きく変わると予想されます。そこではAI・IoTを駆使した企業経営やテレワークを活用した業務など，革新的な経営戦略を実行していかなければなりません。その為には，グローバルベースでのマーケティング精度を高め，センターとの連携を強化しながら鹿児島で開発された優秀な技術，ノウハウを世界に発信しスピーディーに事業展開していく必要があります。

世界の中での鹿児島の立ち位置を理解し，世界の中で勝ち残っていく為に，優秀な鹿児島の強みを強化して活用していきながら今後も努力を続ける所存です。

鹿児島工場内の様子

ベトナム工場内の様子